

2022年10月

杵築市立図書館 図書館だより

読書週間 特別号

2022・第76回 読書週間

10/27～11/9

この一冊に、ありがとう



お二人の“ありがとうと言いたい一冊”は杵築市立図書館にも蔵書があります。人生の指針となる本、生き方が共感できる本など「特別な一冊」を杵築市立図書館で見つけてください。

秋の読書週間の標語「この一冊にありがとう」にちなみ、杵築市立図書館では特別企画として、永松市長と清末教育長にご寄稿いただきました。



NHK テキスト 100分 de 名著

『ボーヴォワール『老い』～年齢に抗わない』

上野 千鶴子/著(日本放送協会編集・NHK 出版編集)

杵築市長 永松 悟

就職し、最初に配属されたのは福祉事務所で、「老人福祉」の担当でした。施設入所の相談があると家庭訪問をします。家族は積極的ですが、ご本人の本音は違います。「老人」福祉ではなく、日々「家族」福祉のために入所手続きをしているようで、心が晴れませんでした。

それから40数年、介護保険の発足と充実で、認知症の方の一人暮らしや、自宅での看取りも実現しつつあります。しかし、高齢者が一人の人間として真に尊重される社会、心から望む老後は、まだまだです。

こうした中、ボーヴォワールの『老い』は強烈です。文明・歴史・文化・社会制度など、様々な分野から考察し、綺麗事ではない「老い」と「人間の本质」を情け容赦なく抉りだします。

人間の幸福に真っ直ぐな、そして妥協の無い彼女の姿勢に圧倒されます。

若かった老人福祉の担当も、玉手箱を開けてないのに、あっという間に老人になり、当事者になりました。老いという冒険の真っ最中です。



『風立ちぬ』

堀 辰雄/著(ぶんか社)

杵築市教育長 清末 陽一

今から遡ること55年前(昭和42年当時)、中学生までは部活動に明け暮れして小説など読む暇もない生活を送っていた。高校に上がる頃、父親が「日本の文学全集」を購入したのと、部活動に入らずに早く帰って時間が持ったこともあり、少しずつ本を手取るようになった。

私自身、中学時代に修学旅行で行った奈良の面影が残っており、数冊をめくっている中に『大和路』という作品が目に入った。作者は「堀辰雄」という作家であった。

堀の作品を読んでいるうちに、『風立ちぬ』という小説にも、出会った。この作品は、美しい自然に囲まれた高原の風景の中で、重い病に冒されている婚約者に付きそう「私」が、やがて来る愛する者の死を覚悟し、それを見つめながら2人の限られた日々「生」を強く意識して共に生きるという内容。

まだ、恋愛とかに疎い私ではあったが、作者の自然の描写に吸い込まれていくなかに「生」とは何かを考えさせられた作品でありました。今から思えば、高校3年間に堀辰雄の作品を始め日本の文学にのめりこんでしまった自分がいました。

『極上の孤独』

下重 暁子/著 (幻冬舎)

孤独のイメージは悪???

孤独を味わえるのは選ばれし人
孤独と品性は切りはなせない
組織のトップはみな孤独
淋しさと孤独はちがいます

私にとって、ポジティブに元気になれる一冊です。

館長 栗屋 文世

『竜馬がゆく』

司馬 遼太郎/著 (文芸春秋)

竜馬の生き方に感銘を受けた本。

課長補佐 中根 幹雄

『銀河英雄伝説』

田中 芳樹/著 (東京創元社)

10代で出会った人生のバイブル。

正義は絶対的なものではなく相対的なものということ、真実は事実に基づき個々人の視点によって存在する、ということが今でも心に刻まれています。

藤澤 実千代

『指輪物語』

J・R・R・トールキン/著 (評論社)

本作のおもしろさは語るまでもありませんが、世界観が様々な作品に影響を与えています。

ファンタジーの可能性を広げてくれたことにも感謝。

佐藤 美央

『色々な色』

プロ編集室/構成・文 (光琳社出版)

昔、親から貰った一冊です。様々な色の名前の由来と、美しい写真が載っている本です。

眺めているだけで感性が豊かになります。

大谷 美野里

『王国その1~4』

よしもと ばなな/著 (新潮社)

主人公が、自分らしく生きていける形を探す姿に背を押され、目の前のことだけにとられず、視野を広げようという気持ちを思い起こさせてくれます。落ち込んでしまった時に読み返す大切な一冊です。

加來 睦美

『楽園とは探偵の不在なり』

斜線堂 有紀/著 (早川書房)

主人公やその周りの人々の、例え青臭く思われても愚直に正義を信じ貫き通そうとする姿勢に勇気づけられ、自分の思う正しさを信じて生きていてもいいのだと気づかせてくれた一冊です。

青野 まどか

『言葉の贈り物』

若松 英輔/著 (亜紀書房)

“言葉”の大切さを再認識した本。

“本”を手渡すことを生業とする自分にとって、たびたび思い返すことが必要とされるもの。

何度も読み返したくなる一冊です。

岸川 美千代

『かみさまからの おくりもの』

ひぐち みちこ/著 (こぐま社)

赤ちゃんは“おくりもの”をもって生まれてくるのです。

川原 裕子

『悲しみの秘義』

若松 英輔/著 (ナナログ社)

悲しみを乗り越えた人の、優しさを感じる言葉を引用しながら、著者の心の声を伝えている。大切な人を失った悲しみとの向き合い方、そして、深い悲しみの中で考えた「悲しみの本当の意味」を教えてくれる。

山形 恵美子

『神去なあなあ日常』

三浦 しをん/著 (徳間書店)

都会に住む主人公の神去村での日常生活を描いた一冊。

少し落ち込んでいた時に笑いで元気を与えてくれました。

津崎 真穂